

近藤史恵 スタート マールテル



近藤史 スタート マエ



スタバトマーテル

一九九六年 六月二五月初版印刷
一九九六年 七月七 日初版発行

著 者 近藤 史恵
こんどう ふみえ

発行者 嶋中 鵬二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二・八・七

電話 販売部〇三(三五六三)一四三一

編集部〇三(三五六三)三五六四

振替 〇〇二二〇・四・三四

印刷 三晃印刷(本文)

大熊整美堂(カバー・表紙・扉)

製 本 矢嶋製本

Printed in Japan CHUOKORON-SHA, INC.

© 1996 FUMIE KONDOU

ISBN4-12-002592-6 C0093

日本音楽著作権協会(出)許諾

第九六六三〇二八・六〇一号

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えます。

目次

プロローグ

5

第一章

9

第二章

37

第三章

70

第四章

102

第五章

143

第六章

159

第七章

181

第八章

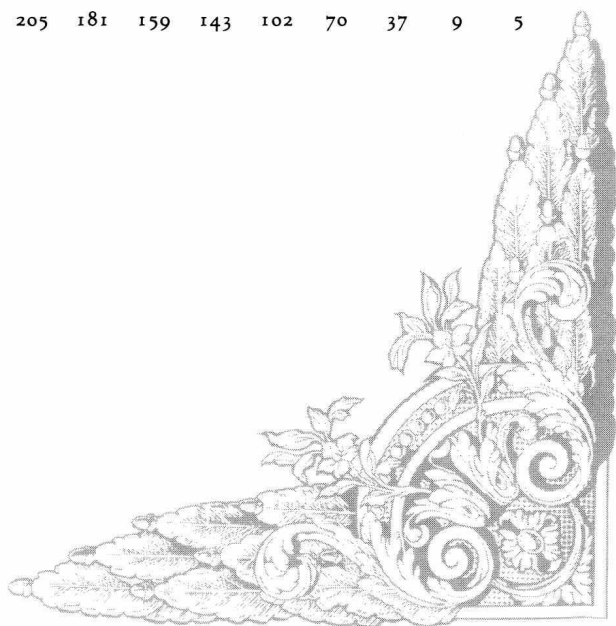
205

エピローグ

232

あとがき

237



カ 装 装
ッ
ト 幀 画

和 渡 加
瀬 辺 藤
久 和 俊
美 雄 章

スタバトマーテル

プロローグ

悲しみに沈める御母は涙にむせびて、
御子の懸り給える

十字架のもとにたたたみ給えり。

ねえ。

なに？

消しゴム落としちゃった、拾って。

あ、どこ？

そこそこ。

はい。

さんきゅ。お腹すいたね。

すいたあ。あたし、今日おべんと作ってきたんだ。

あ、いいな。じゃあ、あたしパン買ってくるから、外で食べようよ。

賛成、いい天気だもんね。授業に出てんのなんか、もったいなあい。

でもさでもさ。あたし、この授業嫌いじゃないよ。

あ、あたしも、わりとおもしろいもんね。

それもあるけどお。それよりも、先生。

先生が、どうしたのよ。

ちょっと、よくない？

やだ、そういうこと。うん、たしかに悪くないかもね。ちょっと、野性の男入ってる感じだし。

でしょでしょ。だって、うちのガッコって、軟弱くんばかりじゃない。芸術家で、あのルックスって、ちょっといいよね。

山城くんが聞いたら、怒るわよ。

あいつはあいつよお。ねえねえ、先生独身でしょう。ちょっと、接近してみようかなあ、なんてさ。

でもさ、聞いたことない？

なに？

うわさなんだけどお。先輩が言ってたのよ。あたしはほんとかどうか、知らないわよ。
なによ、教えてよ。

あの先生を好きになると、やばいんだって。

やばい？

なんか、数年前に、先生にすごく熱上げた女子学生がいてさ、ほとんど追っかけ状態？ 電話かけたり、家の前で待ってたり、もう、すごかったらしいのよ。その子がさ、急に学校こなくなっただって。それで、不思議に思った人たちが調べたら……。
どうなったの？

精神に異常をきたして、精神病院に入院してたんだって。

うっそっ、偶然じゃないの。

それだけじゃないのよ。先生と仲が良かった独身の女の先生がね、交通事故で死んじやったこともあったんだって。

えっ、うそうそお。

先生の特講受けるって言ったら、先輩がね。あの先生にだけは惚れるなよって……。

こわい。でもでもお、ちょっと危険な男って感じい？

言えてる言えてるう。それでえ、あと副手の女の人さあ。

きやつ、まだあるの。

「そこ、私語は控えて！」

中

STABAT MATER

わ、見つかっちゃった。
怒られちゃったね。

第一章

喉が震える。

声は空気に溶け込みながら、空間に広がっていく。色彩のように空間に滲み、雨のように、景色を濡らす。

わたしのソプラノは鳥だ。風に乗って羽ばたきもせず、空を飛ぶ。

伴奏は風。つかず離れず、それでいてわたしの声に絡むように、大地を震わせる。

音は全身に共鳴し、わたしは声だけの存在になる。背筋にびりびりと響く高音。頭の奥が真っ白になるみたいだ。

この瞬間のために歌うのだ、と思う。わたしの声は、わたしだけのものではない。籠に閉じ込められている鳥、それを空に放してやるのだ。

声は、わたしの中からのびのびと巣立っていく。

「りり子さん、すごいな。さすがだよね」

佐野くんの声で我に返った。

「りり子さんがハンナをやった方がいんじゃないか。暗譜もばっちりだしさ」

そのことばで気がついた。ここはわたしのいるべき場所じゃないのだ。あわてて、楽譜を佐野くんに、押しつける。

「だめだめ、学生のための演奏会じゃない。板野さんにまかせなさい」

学園祭がらみの演奏会の練習だった。三年生たちが選んだ演目は、オペレッタの「メリイ・ウィドウ」。たまたま、ハンナ役の女子が風邪を引いてしまったとかで、いきなり代役に引っぱり出されたのだ。

「もし、いきなり板野が倒れても、りり子さんがいるから安心だな」

「莫迦、そういうときはあんたたちの中から、代役を出すのよ」

ざわめきと重なって、だれかの声が聞こえた。講堂は、ひそひそ声でもよく響く。

「学生の時は、藤城のディーバって評判だったらしいわよ」

「それでも、簡単にプロにはなれないんだあ」

自分のことを言われているのだ、とわかると背筋が凍りつく。場違いなところで本氣を出してしまったことが恥ずかしく、早く、この場から去りたかった。

監督役の西邦生が、パイプオルガンの椅子に腰を下ろして考え込んでいる。いやがるわ

たしをこの場に引っぱり出したのも、彼だった。

「帰るわよ。西先生」

わたしは書類で、彼の肩をぽん、とたたく。

「あ、おれも帰る。待ってろよ」

女子学生たちが、きやらきやらと笑いながら、帰っていく。

「先生、ありがとうございますあ」

「おお、気をつけて帰れよ」

人懐っこい童顔と長身、大学の講師の中でもいちばん若い彼は、女子学生たちに人気がある。アイドルと言えは聞こえはいいが、要するにおもちゃみたいなものだ。ただでさえ、音楽学科は圧倒的に女子が多い。

わたしは、西が楽譜を束ねるのを、オルガンにもたれて待っていた。

「りり子さん、そのかっこ、いいね。目のやり場に困るぜ」

佐野くんが、舞台下から声をかける。今日の太股の付け根で短く切ったジーンパンは、下から覗くときぞ、きわどいところまで見えるだろう。

「休日出勤してるんだもん、これくらいいいでしょう」

「いいもなにも、大歓迎ですよ。脚、長いなあ」

音楽学科の女子学生たちはお嬢様が多い。花柄のてろんとしたワンピースだの、清楚なニットスーツなどに混じると、よけいに過激に見えるんだろう。だが、この格好も、行き

帰り、美術学科やデザイン学科の学生たちと混じると違和感がない。

「でも、うるさい学科長や竹内教授なんかが、いろいろ言いませんかあ」

「言ってたぜ」

西がにやつきながら、ボールペンを弄してあそんでいる。

「このあいだ、りり子、脇腹出してただろ」

「ああ、ミニ丈のトップスにオーバーオール着ていたとき？」

「竹内教授が、『りり子くんがまたあんな格好してたら、わたしに報告しなさい』ってさ」
「げ」

「で、注意するんですかって聞いたら、『いや、見損ねたらもったいない』」

「あの、スケベじい」

わたしは黒いハイソックスの足を組んだ。

「ま、ご老体の小さな楽しみですからね」

大笑いしたあと、佐野くんは真顔に戻った。

「西先生、まだ、帰らないんだったら、鍵預けときますけど」

「ああ、りり子、もらっというて」

わたしは、しゃがんで佐野くんから鍵を受け取った。

「おれ、明日竹内教授のレッスンがあるんですよ。りり子さんが、今日ケツ見えそうな短パンはいてたって言ったら、悔しがるでしょうか」

「しまいに怒るよ」

佐野くんは、にやり、と笑うと、フルフェイスのヘルメットを片手で上げた。挨拶のつもりなんだろうか。

いい子ちゃんぞろいの学生の中では、傍若無人でかなり目立つタイプだが、決して劣等生ではない。甘く張りのあるテナー、今度の公演でも、ダニロ・ダニロヴィッチ伯爵を演じることになっている。

生徒が帰ってしまうと、西はいきなりパイプオルガンを開けた。

「なによ、帰るんじゃないの」

「りり子、最近歌っていないだろ。だいぶ、声が錆び^{さび}びついている」

「大きなお世話よ」

「歌っていけよ」

わたしの返事も聞かず、パイプオルガンに手をかける。弾きはじめたメロディは、何年か前に、歌い込んだ聖歌だった。

Stabat mater dolorosa

悲しみに沈める御母は涙にむせびて。

キリスト教聖歌のひとつ、スタバトマートル。十字架の下に立つ聖母マリアの嘆きを歌った聖歌だ。多声合唱曲としても、多くの作曲家が、曲をつけている。ハイドン、ドヴォルザーク、ロッシニ、ヴェルディ。その中でも、このベルゴレージのスタバトマートル

は、メロディのものの悲しき、荘厳さで際立っている。

つられるように声が出る。重なって、少し先を行くはずのアルトも、管弦楽もない。その分、メロディの哀れさが際立った。

くやしいけど、まだ、歌うことは好きだ。

この歌を歌っていたころ、わたしと西は恋人だった。

第二曲のアリアの歌詞が、頭をかすめる。

歎き憂い悲しめるその御魂は、鋭い刃もて、貫かれ給えり。

それから、数年が経ち、わたしは歌も西も、両方失った。別に悔やむことはなにもない。自分を責めることもない。なるようにしかならなかった、ただ、それだけだ。

西がパイプオルガンを止めた。声だけが取り残される。

「どうしたのよ」

「あいつ、おまえに見とれている」

「は？」

後ろを振り返る。

講堂の中期に、男性がひとり立っていた。着古したように色褪せた緑のシャツに、子どものような黒いキャップをかぶっている。日に焼けた皮膚、がっしりとした肩、剃刀で裂いたような鋭い一重の目。

目が合う。男は少し狼狽した。べこん、と頭を下げると、逃げるように講堂から出てい